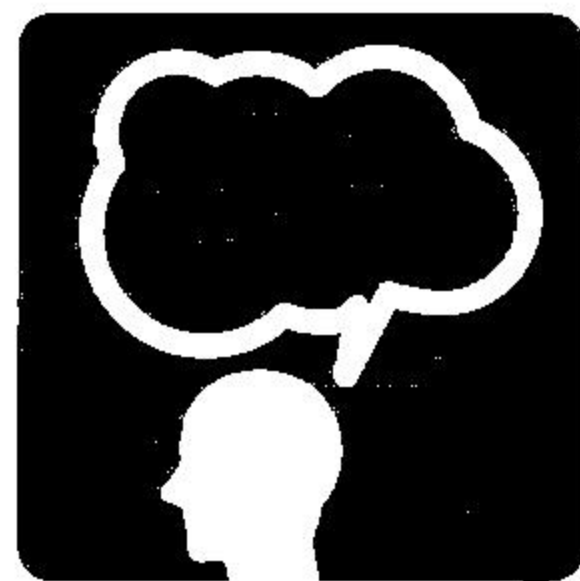


経営(継業)のツボ



転期に立つ経営者の資質の鍛え方<sup>79</sup>

わをもってたつととなす

以和為貴

早川浩士

有限会社ハヤカワプランニング代表取締役

はやかわ・ひろし

経営コンサルタント。1991年に独立。介護事業に関する独自の調査に基づいたデータ分析を各誌・紙に発表。著書に『早川浩士の常在学場』(筒井書房)、『介護人財創造塾』(筒井書房)、『介護保険改正に勝つ!経営』(年友企画)、『データで徹底分析 介護事業の最新動向と経営展望』(日本医療企画)など。

http://www.hayakawa-planning.com  
ブログ: http://ameblo.jp/hayakawa-planning/

和を以って貴しと為す

これは、聖徳太子がつくった「十七条の憲法(わが国初の成文法)」の第一条の冒頭の言葉である。「忤うこと無きを宗とせよ。人みな党あり、また達れるもの少なし。ここをもつて、あるいは君父に順わず、また隣里に違う。しかれども、上和ぎ下睦びて、事を論うに諧うときは、すなわち事理おのずから通ず。何事か成らざらん」と続く。

「和をなによりも大切なものとして、いさかいを起こさぬことを根本にすること。人は誰しもグループをつくりたがるもの。しかし、そのなかで真の人格に秀でるようになりリーダーはわずかしかない。そうだからといって、君主や父親のいうことを従わないようであるなら、近隣の人たちと真面につき合えることなどありえない。だが、考えてみるのだ。上の者も下の者も、協調と親睦の気持ちをもって論議をすれば、自ずからものごととの道理に適い、どんなことも成就するものである」が大意である。「なごみ(和)」「和が家」など、介護事業所の名称にも見かける「和」

には、次の意味がある。

- ①「和製」「和風」「和装」「和訳」など、日本を表す意として。
- ②「和気」「柔和」「温和」など、おだやか、のどか、なごやかな意として。
- ③「和解」「親和」など、仲よくすることの意として。
- ④「総和」など、2つ以上の数や式などを加えて得た値の意として。
- ⑤「和音」「調和」「中和」など、あわせること、うまくまざることの意味として。

「和」の重要性を大切にしたいと思うからこそ、自分を捨てて周囲に同調しなければいけないと、勘違いをしている人も少なくない。

同じで和せず

「和」とは、『論語(子路13)』の「君子は和して同せず、小人は同じで和せず」のこと\*。

真のリーダーは、人と協調はするが、道理に外れたようなことや、主体性を失うようではならない。それが、「和して同せず」である。ところが、「同じで和せず」と、自分の考えを捨てて周囲の意見に同調するといったような、何の定

見もなく付和雷同してしまおうというリーダーがいる。

そのような人にとっては、「和」と「同」を切り離して考えるための示唆に富んだ一節である。

「和」の理解を深めるには、『論語(雍也6)』の「中庸の徳たるや、それ至れるかな」に記された儒教の中心的概念でもある「中庸」を知ることが大事だ。

「中」は、偏らないことを指し、50対50の真ん中、平均値、足して2で割るとか、といったものを指してはいない。

「庸」は、平常や日常などの常のこと。

また、特定の考えに偏らず何物にも倚りかからないという意の「不偏不倚」を「中庸」ともいう。

「介護保険制度改正に伴う今後の方向性・運営・地域連携のあり方」を具体的に進めていくうえから、「税と社会保障の一体改革」や「新在宅医療・介護元年」の動向には目が離せない。

「AかB」ではなく「AとB」の持ち前を「中庸」しながら「以和為貴」の姿勢で折り合いをつける資質こそ、リーダーは身につけねばなるまい。

\*本誌2005年1月号本欄参照